



『雲の手通信』は、おかげさまで150号を迎えました。読者の方々のお励ましがあってのことで厚く御礼申し上げます。担当教室の皆さんへの情報連絡の手段として、また指導教材の一つとして、2004年4月に第1号を発行し、その後ほぼ毎月発行してまいりまして、ようやく150号に達しました。

第1号から、日本健康太極拳協会東京都支部のホームページに転載していただきましたことから、楊名時太極拳の愛好者の方々にも広く読んでいただくようになり、インターネットでも『雲の手通信』で検索すると開くようにもなりましたことから、いっそう読者層が広がったことは、望外の喜びです。

これからも、引き続きご愛読いただけるよう、楽しみつつ、また工夫と努力を重ね、号をさらに重ねてゆくつもりですので、よろしくお願いいたします。

今号は第150号記念号として、中野完二先生はじめ、関係者、教室の代表者から、また一般読者を代表して友人の阿刀田高氏から、それぞれいただいたお祝辞を掲載させていただきます。

なお、それぞれの末尾の水色の部分は小生のコメントと謝辞です。

『雲の手通信』第150号に！ おめでとうございます

本部道場中野教室 主宰 中野完二

『雲の手通信』は、茶木登茂一師範が個人で発行されてきた、言わば、個人誌です。A4判4ページの横組みで、毎月1回発行されてまいりました。奥様の茶木中子師範のご支援、ご協力も当然あったことでしょうけれども、創刊号から茶木師範が、原稿を書き、写真を撮り、説明図を作成し、自分でパソコンで1字1字打って、発行して来られた発行物です。「個人誌」と書きましたが、「雑誌」というより「通信」です。

ご自分が指導する、いくつかの太極拳教室の会員の皆さまに、教室で、黒板に書いたり、話した内容を、確認していただけるように、『通信』に載せたのが始まりだったのでしょうか、時にはページも増えてたり、内容も、教室のニュースや講話の中味だけでなく、東京都支部や、東京都支部の南地域、北地域などの動きも伝えたり、「太極拳まるごと勉強会」や「左顧右盼(さこうべん)」「健康妄語録」「旅をうたい拳を詠む」など、『通信』には、たのしく読んでいただけるような工夫を凝らしてあります。


私もずっと愛読させていただきました。時には郵送していただくこともあり、大層学ばせていただきました。ありがたいこととございます。

定期刊行物を定期的に、継続して発行するのは、どんなにたいへんか、どんなにご苦労されたかと推察しております。

『雲の手通信』のバックナンバーから選んで楊名時太極拳の内容を深め、指導、普及

茶木登茂 - 先生に

竹林の



矢来も竹か

気がつけば

徳の傘をさしている


ものやわらかな

風が吹いている

瑞風と言うべきか

2017年2月2日

中野 隼二



に役立つ1冊の本にまとめてくださると、すばらしいと思いますし、歌人として、短歌を歌集にまとめてくださることを願っています。

2月2日の本部道場中野教室の新年会に、竹植先生と中野が「2016年太極拳全国交流大会」で「健康大賞」をいただいたことなどのお祝いの会に合わせて、茶木登茂一師範の『雲の手通信』第150号を祝うことにさせていただきます。

茶木師範と関連教室の方々に「おめでとうございます」とお祝い申し上げさせていただきます。お祝いに茶木師範のお名前を頭に折り込んだ詩を贈らせていただきます。【左】

これからも、同心協力で、いっしょに楊名時太極拳を広め、深めていきましょう。

なお、小説家の阿刀田高さんは、茶木さんの高校時代の同級生で、私の大学時代の同級生です。茶木さんご夫妻は阿刀田さんご夫妻とは旅行や日常の交流をされていらっしゃる由です。ご縁のつながりを深く感じています。

【写真左；日比谷・松本楼にて、右中野先生・左茶木】



たいへんなお褒めをいただき恐縮しております。いつもながらの先生のお心配り、まことにありがとうございます。おかげさまでこのように第150号記念号を出して皆さまからお祝いいただくこととなりました。これもひとえに先生のおかげとあらためて感謝申し上げます。またすばらしい詩を、ありが

とうございます。なお、中野先生の傘寿を祝う短歌を作りましたので、最終ページに掲げさせていただきました。

『雲の手通信』第150号の発刊、まことにありがとうございます

東京都支部HP管理人 露澤 徹

2004年4月の第1号発刊時に、日本健康太極拳協会東京都支部ホームページ転載許可をお願いしたところ、快諾をいただきました。それ以来約13年にわたり、ホームページの重要な掲載記事として読者から絶大な支持を得ております。

月が替わると、ホームページの参照数を表すカウンタが顕著に増加します。これは、『雲の手通信』を心待ちにする読者のアクセスと思われれます。また、各ページの参照記録を見てみると、第1号から最新号までを一覧できるページをお気に入り登録する読者も多いようで、そこを直接アクセスし、何度も既刊号が読み返されているようです。月初めの掲載が少しでも遅れたりすると、どうしたのかとの問合せが舞い込みます。毎月うれしい悲鳴をあげながら、掲載作業を進めさせていただいております。

今後も 200 号、300 号を楽しませていただきたく、愛読者の一人として茶木師範の執筆活動を微力ながらご支援させていただきます。

ホームページに載せていただいたおかげで読者層が広がりました。また、いつも適切なアドバイスやチェックをいただき、たいへん助かっています。あらためて、この機会を借りて厚く御礼申し上げます。

『雲の手通信』は啓蒙書です

瑞江鶴の会 元代表 宇留野良子

私が書店に行く日は、ほとんどが火曜日です。それも月初めの火曜日。茶木先生発行の『雲の手通信』を手にする日です。『雲の手通信』で紹介された書籍や記事の内容に刺激され、自分なりに深めようと書店、図書館、ネットに、と走ります。私にとって「健康妄語録」は健康指南書であり、「左顧右眄」は多岐にわたる啓蒙書です。

その『雲の手通信』が今号で150号。2004年4月から足掛け14年。これはもう大事業です。読み手はただ待っているだけですが、発行人茶木先生にとっては大変なことであろうかと思えます。と思うのは凡人で、博学多才な茶木先生は、苦の片鱗も見せずに毎月第一週には情報満載の雲の手通信を教室で配布してくださいます。『敬服』の一語に尽きます。茶木先生と『雲の手通信』のますますのご活躍、発展を祈念して第150号発刊のお祝いとさせていただきます。おめでとうございます。

過分なお褒めをいただき汗顔の至りです。多少でもお役に立てていれましょう嬉しいです。瑞江鶴の会の次の指導者としてすでにご利用していますが、瑞江鶴の会、そして、支部活動、よろしく願いいたします。

150号は驚異的！

東大島鶴の会 代表 鈴木 武

『雲の手通信』が創刊より150号に達したこと、おめでとうございます。茶木先生おひとりで毎月発行されてきたことは、まことに驚異的なことです。ちなみに、社会に広く認知されてきた雑誌で、2016年に休刊になったものが28誌あります。そのうち、150号に満たなかったのは9誌で全体の3分の1、倍の300号未満が14誌で5割です。人と金を費やしても長く続けることは困難です。

『雲の手通信』の内容は、太極拳を核にして身体のことと中国の思想歴史が柱をなしています。茶木先生が興味をもって調べ書いていることが、長続きの秘訣だと思います。太極拳をする身として、長く続けることが一番だと心に決めています。私たちの師範である茶木先生がその模範であることを誇りに思い、幸せに感じています。

元大学教授の鈴木さんに、会の運営をずっとお任せしていますが、その卓越した掌握力と処理能力で、万事上手にさばっていただき、いつも感謝しております。今年3月の10周年記念行事をよろしく願いいたします。

亀戸SC会よりニーハオ！

亀戸スポーツセンター教室 世話人 鈴木圭二

『雲の手通信』発刊150号おめでとうございます。「亀戸スポーツセンター太極拳教室」を受講して10年目になります。不器用な質ですが太極拳は大好きです。

ちょっと古い話ですが、平成23年に亀戸スポーツセンターが長期修繕で休館となり、教室が閉鎖されたときに、先生のご助言とご努力下、近くの江東区青少年センターで自主サークル「健康太極拳亀戸SC会」を44名で立ち上げることができたことについては、たいへん感謝しております。おかげで1年後、センターの再開に合わせてすんなりと継続的

思い、お願いしたところ、快く引き受けていただきました。

2009年5月、第1回下町会講義の始まりです。「楊名時太極拳の成り立ちと簡化二十四式太極拳との関連」という話をさせていただきました。それからほぼ毎月、茶木先生が話したいこと、われわれが聞きたいことを、7年間にわたって続けております。

そのほかに、江戸時代の勉強もされているとのことなので、男組と称して江戸を歩く、深川や、飛鳥山、麻布十番など、当時の話を聞きながら歩き、最後はその地の居酒屋で打ち上げです。さて、次はどこかの地の居酒屋で、お酒をいただきましょうか。

毎月の『雲の手通信』、下町会の資料、地元での勉強会の資料、いつ勉強され、原稿を書かれるのですかと聞いたことがあります。本部、支部の仕事、短歌を詠まれて、すさまじいエネルギーの持ち主です。

下町会のあとの、太極拳の話、歴史の話、世上の話などなど、酒を酌み交わしながら、とても幸せな刻をいただいています。有難うございます。

下町会に呼んでいただき、いろいろ話をさせていただいたおかげで、それを下地にして、船堀の勉強会も開くことが出来ましたし、さらには『雲の手通信』の「左顧右眄」などの原稿にも使わせていただいています。こちらこそたいへん感謝しております。

七色の雲を広げて

作家 阿刀田 高

『雲の手通信』は、いつも美しい。内容も多彩であり、入念である。

——七色の雲だな——

と手にするたびに少しうらやましい。

うらやましいと思う理由は、後で述べるが、発行人の茶木登茂一さんと私は高等学校の同期生である。当初、私は理系を志望していたのだが、彼は新聞部に属していて、精力的に学生新聞を創っていた。

——こんな仕事もあるんだ——

と私はジャーナリズムへの憧れを強く抱いた。

結局、彼は実業に就き、新日鉄の営業マンとして辣腕を振るった。私は文学を専攻し、曲折のすえ文筆を生業とするようになった。

いま『雲の手通信』を見ると、

——茶木は、やっぱりジャーナリストのセンスを十分に持っていたんだな——

と、つくづく思う。私は文筆業に就きながら、どこか、

——本当に向いていたのかな——

と訝しく思う時がないでもない。少なくとも文筆を本業とすることは、これを素直に楽しむことは出来ない。読書も取材も執筆も、みんな伸るか反るかの戦いなのだ。50年も続けると、正直なところ少し厭になる。

——気ままに自分のジャーナリズムに没頭できたらいいな——

『雲の手通信』150号は楽しいことばかりではなかっただろうが、のびのびと編集されているのを見て、少しうらやましいのである。

寄稿いただきありがとうございます。言われてみれば、たしかに、私にとっての『雲の手通信』は、書いたり、新しい企画を考えたり、見出しを付けたり、レイアウトを工夫したり、することが、好きで楽しみだから、続いてきたのだと思います。

太極拳も同じですが、『これを楽しむ者に如かず』（論語）という気持ちで、これからもゆったり、のんびり続けてゆくつもりです。引き続きご愛読ください。

遊印遊語 早暁之鍊

小生の作った漢詩「早暁之鍊」を彫ったものです。

冬の朝の寒気の中で身も心も引き締まるような気持ちで一人演じる太極拳を詠った詩です。

『黎明に残月淡く 林間の寒気凜たり まさに太極を感得せんとして 気を沈めて一人拳を舞う』と読みます。

20年以上前の昔から近所の公園で一人でやっていた時代を詠った詩ですが、今は、土曜日の朝はプロバンス会で大勢の皆さんと、月曜、木曜の朝はご近所の5~6人の方と、それぞれ、楽しくのんびりと演じています。

早暁之鍊	黎明残月淡	林間寒氣凜	將感得太極	氣沈独舞拳
------	-------	-------	-------	-------



6

旅をうたい拳を詠む 思い出のうた

思い出に残る歌、とくに太極拳に関係のある歌を中心に、第1号から第50号の範囲から選んだものをお届けします。

2004年4月第1号 シルクロードの旅、トルファンで詠んだ歌です。“雲の手”はこのあたりからの発想です。

ウイグルの美女に誘われくるくると雲手ふうの胡旋舞を舞う

2004年7・8月第4号 亡き豊島なつ江先生を偲んで、一周忌に詠んだ歌です

熱きころ抱きしままに旅立ちて かの地にいまも鶴と舞ふらん

2004年11月第7号 10月10日の審査会で「師範」をいただきました。

禅か能か静中動の幽玄に 傘寿の師家の「八段錦」は

応援のあまたの視線に支えられ 審査の拳を舞い納めたり

2006年2月第21号 投稿歌が「特選」に入り、NHK短歌大会に出場しました。

ネックレス腕輪指輪にイヤリングみんな光って君が見えない

2007年10月第39号 中野教室の「やみぞ合宿」を詠いました。

年一回の邂逅なれど師を囲みたちまち和の輪広がる楽しさ

2007年12月第41号 東大島鶴の会でのひとこまです。

木犀の香の入りくればたちまちに気の和みゆく太極拳教室

2008年1月第42号 亀戸スポーツセンター教室にて詠む。

窓いっぱい射しくる冬の陽を背(せな)に舞う太極拳の柔らかきこと

2008年3月第44号 ペルー旅行の歌。(マチャピチュ遺跡にて)

日時計とふ不思議な岩に宿りたる気を受けんとて按の手かざす

中野完二先生の傘寿をお祝いして、先生のお名前を折り込んだ短歌を作りましたので、ご披露します。

永^{とき}き歳月 重ねて傘寿 ^{のどか}長閑なり ^{かん}爛のぬるきを ^くじつくりと酌む